

「戦争」を考える ～資料から探究する事例・方向性の提案～

作成者：東 佳栄、大野 健人、亀田 直彦、乾 広久、
斎藤 紘一、水谷 一路、三輪 玲以佳

教育メタデータ

8322203311600000

8322203322300000

8322205130000000

8322205120000000

教科：社会科



戦争学習を考える～課題意識～



1. 「戦後80年」

→戦争と日常が断絶しているように考えていないか

: 戦争が終わったらすぐ平和で豊かな生活が送れる

のか

: 1945年以降、日本は戦争に全く無関係だったのか

→現代の戦争に無関心でいてはいないか

2. 戦争とは何か

→権力と民衆

: 人々の日常は戦争によってどう変わったのか

: それぞれの立場からそれぞれの理屈

戦争学習を考える～教材の方向性～

1. 資料から探究する
2. 様々な立場の資料を考える



【第1室】「巻き込まれる」とは、どういうことか



タイトル：シリア 負傷の男児を救出 政府側空爆で被害

撮影日 2016年8月17日

提供：AMC/AP/アフロ（提供・ビデオ画像）

キャプション： In this frame grab taken from video provided by the Syrian anti-government activist group Aleppo Media Center (AMC), a child sits in an ambulance after being pulled out of a building hit by an airstrike, in Aleppo, Syria, Wednesday, Aug. 17, 2016. Syrian opposition activists reported an airstrike on the al-Qaterji neighborhood in Aleppo late Wednesday. (Aleppo Media Center via AP)

出展<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=35159661&c=AND>
（株式会社アフロ検索サイト）

※2次利用に制限があるためサンプル写真を掲示し、アクセス先を明記しています。本件教材や本資料の利用をご希望の場合はあらかじめご連絡をお願いいたします。（お問合せ：saito.koichi@aflo.com 担当：斎藤）

アフロ提供資料

現代、政府側の空爆によって被害が出ている地域がある。

模擬爆弾による実験ではない。

しかも、シリアでは子どもが被害を受けている。

2025年現在も「巻き込まれ」ている人々がいるのではないかと。

立命館大学国際平和ミュージアム 収録

『原爆模擬爆弾』（表記なし、要申請）

https://wwwb2.musetheque.jp/ritsumeikan_peacearchives/detail?cls=kitakukizo&pkey=90,00512

立命館大学国際平和ミュージアム提供資料

戦後、模擬爆弾の投下実験が伊江島などで行われていた。爆風・閃光・キノコ雲状の煙など原爆に近づけた実験だった。本土が平和主義を掲げていながら、沖縄は朝鮮戦争に「巻き込まれ」ていたのではないかと。なお、戦中にパンク爆弾が投下されたことも学んだ。

立命館大学国際平和ミュージアム 収録

社団法人生命保健会協会 作成

『国民貯蓄は保険からポスター』（表記無し、要申請）

作成者：社団法人生命保健会協会

https://wwwb2.musetheque.jp/ritsumeikan_peacearchives/detail?cls=kitakukizo&pkey=00,05035

立命館大学国際平和ミュージアム提供資料

戦中、国民貯蓄運動などに動員されていた。

戦費調達のために貯蓄は利用されていた。

戦後には猛烈なインフレーションが発生し、

預金封鎖によって貯蓄を引き出せなくなった。

経済的にも人々は戦争に「巻き込まれ」ていたのではないかと。

【第1室】 テーマ；十字架の意味



(株式会社アフロ検索サイト)

<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=15516711&c=AND>

タイトル：×

メタデータ：1944年4月

自分の解説：これは第二次世界大戦やベトナム戦争などで見られた即席の墓標で戦いの最中に仲間を弔うため、兵士たちはその場で十字架を立てた。現場では死者を正式に葬る時間も場所もなかったため木の枝や銃剣を使い、即席の十字架を作って祈っていたらしい。そこには、戦場の非人間性に対抗する「人間の尊厳」があったのではないかと考えている。



(株式会社アフロ検索サイト)

<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=9736075&c=AND>

タイトル：朝鮮戦争

メタデータ：1951年4月6日

自分の解説：戦争が終わったあと、白い十字架が並ぶ丘が造られ、「集団の死」ではなく「戦争の記憶」を国家として受け止める場ともなっていた。十字架はこの時代、「個の記憶」から「公の記憶」へと変化していったのではないかと考えている。



(株式会社アフロ検索サイト)

<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=15523301&c=AND>

タイトル：Memorial Day.

メタデータ：2012年5月28日

自分の解説：タイトルの「Memorial Day.」は戦没者追悼記念日という意味を持っている。墓碑の上に、戦場にいた者たちを模したおもちゃがあり戦争を知らない世代の「記憶の継承の形」となっている。プラスチック兵士という人工的な素材は、「戦争を遠く感じながらも、忘れてはいけない」という現代のジレンマを映しているのではないかと考えている。

自分の解説：一枚目は人間としての人間の尊厳を守ろうとする「戦争中に生まれた個人的な祈りの象徴」であり二枚目は「個の犠牲を社会が共有するもの」、三枚目は「記憶の継承」というように十字架が持つ役割や意味は変化してきた。十字架は、単に宗教的な象徴ではなく、戦争という極限状況の中で人間が「他者の死」と向き合うための記号であり続けた。そして「Memorial Day.」は、そうした記号が社会の記憶として定着した日であるため過去を悼む日であると同時に、未来の平和を形づくるための倫理的な行為でもあるのではないかと考えている。

(* 写真の枚数や配置は変更してもOKですが、1室につき最低2枚～最大8枚まで)

【第2室】 テーマ ; あゆみの停止



(株式会社アフロ検索サイト)
<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=26070831&c=AND>

タイトル : World War II shoes in.
メタデータ : X

自分の解説 : これらの靴はナチスの強制収容所で没収された犠牲者の遺品であり、数え切れない人々の歩みが強制的に止められた証拠である。この靴の山は、時間が止まった場所、「人間の尊厳」が奪われた場所なのではないか？



(株式会社アフロ検索サイト)
<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=6528495&c=AND>

タイトル : 原爆広島・板垣に焼き付いた人の「形」
メタデータ : X
自分の解説 : これは原子爆弾の爆風と熱線によって、爆心地近くにいた人々の姿が瞬間的に焼きついた「残影」である。この残影は存在と消滅でもあり人類が「生きる」という当たり前のあゆみを止め、止められた瞬間なのではないか？



(株式会社アフロ検索サイト)
<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=21175253&c=AND>

タイトル : 2013年 世界報道写真コンテスト スポット
ニュースの部 組写真 1位
メタデータ : 2012年
自分の解説 : これはイスラエルによる空爆で破壊されたガザのハマス政治局長イスマイル・ハニーヤの事務所跡にあった時計であり爆発の衝撃で砕け、時間を指し示すことをやめている。止まったその瞬間こそが、街と人々が再び「あゆみを止められた」時を記録しているのではないか？

自分の解説 : この三つの写真は、人間の「あゆみ」が様々な形で断たれた瞬間を象徴している。一枚目は尊厳、二枚目は存在、三枚目は日常と、異なる時代と場所で起きたこれらの出来事に共通しているのは、人間が人間の歩みを奪ったという歴史の事実であると考えている。止まったその瞬間を記録として残し見つめなおすことで人類が再び同じ過ちを繰り返さないようにという意味が込められているのではないか？

【第3室】 テーマ ; 国際社会の責任



(株式会社アフロ検索サイト)

<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=168221517&c=AND>

(株式会社アフロ検索サイト)

<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=146660669&c=AND>

(株式会社アフロ検索サイト)

<https://www.aflo.com/ja/editorial-images/search?k=185090475&c=AND>

タイトル : ルワンダ内戦 (1994年)

メタデータ : 1994年

自分の解説 : これはルワンダ内戦中に逃げるツチ族の難民たちの姿を捉えたものである。人々は「生きること」そのものが闘いになっていた。ニュースで知りながら、介入をためらった国もあった。その結果が、群衆の混乱と死の行進を招いたのではないかと、そして彼らには「誰も助けにくれなかった」という感情が潜んでいたのではないかと？

タイトル : 【Magnum Photos】アバス撮影

メタデータ : 1982年

自分の解説 : 大量の墓の整然さこそが、取り返しのつかない結果の象徴であり戻らない命の重みを物語っている。国際社会は、虐殺や内戦の後で「再建」「和解」「記憶の保存」を支援する。しかしそれは、すでに命が失われた後の「事後の正義」に過ぎないのではないかと？

タイトル : x

メタデータ : 1993年3月

自分の解説 : 国連の車列は、一見すると平和の象徴のように見えるが背景には紛争地での無力さ、介入の遅れ、権限の制限という現実がある。ルワンダ虐殺では、国連平和維持部隊が現地にはいたにもかかわらず、介入命令が出されず、80万人以上の命が100日間で奪われた。この写真は、「助けを待つ人々がいるのに、世界はまだ議論をしていた」という皮肉な現実を映し出しているのではないかと？

自分の解説 : この3枚の写真は、ただの過去の記録ではなく、「人類が繰り返してきた過ち」を可視化し、「国際社会の責任」を物語っている。写真が伝えるのは、「無関心こそ最大の暴力」であるということである。国連や各国政府は“中立”を掲げながら、行動しないことで加害の一端を担ってしまった過去もたくさんあったため人類が過去から学ぶべきことは、「見て見ぬふりをした沈黙もまた罪である」という事実なのではないかと？

今後の参考にもなりそうな資料

- *ピースあいち メールマガジンVol.43.* (日付なし). 読み込み 2025年12月26日, から
https://www.peace-aichi.com/piace_aichi/201306/vol_43-3.html
- *広島平和記念資料館 | 展示を見る | 常設展示 | 5 核兵器の危険性 | 5-1 原子爆弾の開発と投下 | 5-1-3 広島への投下 | 5-1-3-2 原爆の模擬爆弾の投下.* (日付なし). 読み込み 2025年12月26日, から
https://hpmmuseum.jp/modules/exhibition/index.php?action=DocumentView&document_id=21&lang=jpn